
思い出

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

思い出

【Nコード】

N1595D

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

小学校を卒業する佐代子。これからのことに不安を感じているとそこにお母さんが来て彼女に言う言葉は。こつした温かい家族が少しでも増えて欲しいです。

第一章

思い出

もう卒業間近だった。佐代子はそのことで頭が一杯だった。

「もう終わりかあ」

この前入学したばかりなのに。もう卒業だ。

「六年もあつたと思つたのに」

一年の頃は六年生が夢みたいな存在だった。けれど気付いたらその六年生になつていてしかもそれももう終わりだ。卒業して暫くしたら中学生である。

中学生というのはもっと想像ができないものだった。それこそ本当になれるのかどうかといったものだった。まさか自分になるとは思わなかつたのだ。

「上手くやっついていけるかな」

不意にそう思つたりもする。

「中学校でも皆と」

今いる小学校のメンバーとはそのまま殆ど一緒である。だがそこに他の小学校の面子も入るのだ。それがかなり気懸かりだったのである。

彼等と上手くやっついていけるかどうか、不安ばかりだった。学校でも家でも同じことばかり考えていたのだ。

そのことがあまりにも心配だったのね。お母さんにも相談することにした。温かいリビングで柔らかいライトブルーのソファアークに向かい合つて座つて話をするのだった。

「そうよねえ、早いわね」

おっとりした丸みのある顔のお母さんが佐代子の言葉に笑った。目も丸く二重でそれでいて奇麗だ。美人ではないが優しい顔をしている。髪も柔らかい。佐代子はそのお母さんに生き写しだとよく言われる。

「佐代ちゃんももうすぐ中学生なのよね」
「それで心配なの」

佐代子は困った顔でお母さんに述べるのだった。

「これからどうなるか」

「心配なのね」

「私。やっていけるかな」

その不安げな顔でお母さんに尋ねるのだった。

「中学校でも。これからも」

「そんなに心配？」

「うん」⁶

またこくりと頷いて答えた。

「どうなるのかって」

「心配しなくていいわ」

けれどもお母さんはそんな佐代子に対して穏やかな笑みで答えるのだった。その顔には曇りがなく静かな顔で言うのだった。母親として。

「佐代ちゃんならね。大丈夫よ」

「あまりそう言われても」

「信じられないの？」

「そうじゃないけれど」

そうは言ってもその顔は晴れてはいない。その顔で俯いたままである。

「けれど」

「あのね」

お母さんはまたその佐代子に言うのだった。佐代子はその顔はよく見てはいなかった。悪く言えば自分のことだけしか考えられなくなっていたのだ。

「佐代ちゃん、小学校に入った時のこと覚えているかしら」

「小学校に」

「そうよ。あの時に」

お母さんは優しい声で佐代子に声をかける。まるで包み込むように。

「佐代ちゃんずっと不安そうだったわね」

「そうだったの」

「佐代ちゃん小さいから覚えていないでしょうけれど」

それは少し声を小さくさせた。そうして言葉を続ける。

「あの時も。凄く不安そうだったわ、これからやっていけるかなって」

「覚えていなかったわ」

佐代子はそのことを本当に覚えてはいなかった。今のことだけでとてもそこまで考えられなかったのだ。けれどお母さんは覚えていたのである。

「そんなこと」

「無理もないわ。だから佐代ちゃん小さかったから」

「御免なさい」

「謝ることはないの」

それは優しく包み込む。何処までも母親の顔と優しさで。

「悪いことじゃないし」

「そうなの」

「それにね」

お母さんはまた言う。

「人ってそうしたものなのよ」

「そうしたものって？」

佐代子は顔をあげた。お母さんの言葉に対して。

「不安や心配といつも向かい合って少しずつ先に進んでいくの」

「そうなの」

「そうよ。お母さんもそうだったし」

「お母さんも」

佐代子にとっては思いも寄らない言葉だった。佐代子にとってお母さんはとても優しくしてしっかりした人だったからだ。実はお父さ

んよりもずっと頼りになると思っている程だ。だがお母さんはここでそのお父さんについても言うのだった。

「お父さんと結婚した時もね」

「うん」

「とても不安だったの。これから一人でやっていけるかしらって」

「何で？」

これは佐代子にはわからない言葉だった。無意識のうちに首を傾げさせる。

「結婚したのに」

「佐代ちゃんがそれをわかるのも少し先になるでしょうね」

だがお母さんはそこから先は言わないのだった。それはお母さんの気遣いだったが佐代子にはまだわからないことだった。まだわかるには佐代子は幼いからだ。

「それでもね。その時」

「何があつたの？」

「お父さんが支えてくれたのよ。僕がいるから大丈夫って」

「お父さんが」

「僕でよかつたら助けさせて欲しいって」

昔を見る目になっていた。その目は佐代子にもわかった。とても優しい目をしているのがとてもわかった。

第二章

「そう言ってくれたから。だから」

「そうだったの」

「お兄ちゃんがお腹の中にいる時も佐代ちゃんがいる時も」

お母さんはその時のことも言う。

「お父さんが支えてくれたわ。とても心配していたお母さんをね」

「あのお父さんが」

「誰だって同じなのよ」

お母さんはまたそれを述べて強調した。そうして佐代子の心に刻み込むかのようであった。

「不安なの。誰もね」

「私だけじゃないんだ」

「けれどそれは乗り越えられるの」

お母さんの言いたいことはそれだった。それをはっきりと言うのだった。

「そうして乗り越えたら」

「乗り越えたら？」

「不安や心配が楽しい思い出になるのよ」

「そうなの」

「今の佐代ちゃんだってそうよ」

顔を上げている佐代子の顔を見る。心配が少しずつ消えていつているのがわかる。それはお母さんにもよくわかった。そのことで心の中で笑ってもいる。

「今だってね。小学校に入る時も」

「いい思い出になって」

「アルバムがあるわね」

「うん」

佐代子が持っているアルバムだ。それは彼女の部屋にある。

「あれ見ればわかるわ。佐代ちゃんとても心配そうな顔をしてお父さんとお母さんの間にいるから」

「あの写真ね」

それを言われてやっと思い出した。自分がその時どんな状態だったのか。確かにこれから心配で仕方なかった。それが顔にもはつきりと出ていてお父さん、お母さんと一緒にいたのだ。

「そういえば私」

「けれどお父さんとお母さんが大丈夫って言って。すぐにお友達もできたじゃない」

「そうだったわね」

その通りだ。それで彼女はすぐに元気になったのだ。そのことを今思い出した。

「それで私」

「今だつて同じよ」

お母さんは今の佐代子について話を戻した。

「お父さんもお母さんもお兄ちゃんもいるし」

「お友達も。小学校からのお友達も」

「ええ」

今それで気付いた。自分は一人ではないということも。

「皆が支えてくれるから。安心して」

「うん。これからもそうよね」

「勿論よ」

また優しい笑みを浮かべるのだった。その顔で佐代子を見詰めていた。

「きっとこれから。佐代ちゃんにも旦那様ができて子供もできて」

「お母さんみたいに」

「なれるわ。きっと」

佐代子はその言葉で包み込んでいく。佐代子はその言葉の中で自分の心の中の心配事を消していくのだった。いや、自然にそれが溶けていつていた。

「だから安心して。幾ら心配や不安があっても」
「支えてくれる人がいるから」
「いてくれるから。いいわね」
「うんっ」

これまでよりも強い言葉で頷くのだった。それが今の彼女の心だった。

「わかったわ、お母さん」

「わかってくれたのね」

「私中学校でも楽しくやるから」

絶対にそうなると思えるようになっていた。お母さんの今までの言葉で。

「頑張るわ。有り難う」

「わかってくれたのね。よかったわ」

「それでね。お母さん」

「今度は何かしら」

話が変わったのがわかった。お母さんはその優しい笑みのまま娘に応えた。

「私も。早く旦那様が欲しいわ」

女の子がよく夢見る。お嫁さんの話になっていた。

「早く。お母さんみたいに」

「今は駄目よ」

「駄目って？」

「焦ることはないのよ」

やはり優しい顔で佐代子に告げるのだった。

「佐代ちゃんを待っていていてくれるから」

「そうなの」

「ええ。だから焦っては駄目よ。かって駄目になるから」

「そうなの。それじゃあ」

お母さんの言葉に頷いて。納得する佐代子だった。

「そうするわ」

「絶対ね。お母さんとの約束よ」

「うん」

「指切りげんまん」

お母さんはそつと右手を出してきた。小指を立てて。

佐代子もそれに応える。そうして二人で指切りをするのだった。

「これでいいのね」

「ええ、これでいいわ」

にこりと笑って終わった。これで約束ができた。

「じゃあお母さん」

佐代子は約束が終わってからお母さんにまた言う。

「何かしら」

「これからも色々あって心配なことも一杯あるけれど」

「ええ」

「私それでもやっていくわ」

明るい顔になっていた。その心配を一つ乗り越えた顔であった。

「そうでいいのよね」

「ええ、そうよ。お母さんも皆もいるから」

「うん、頑張るわ」

にこりと笑ってお母さんに言う佐代子であった。そうして中学校に入っすぐに。新しくできたお友達を家に連れて来た佐代子を見て目を細めさせるお母さんがいた。

思い出 完

2007・10・20

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

PDF小説ネット発足にあたって

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1595d/>

思い出

2008年11月7日07時03分発行